

# 斑点米カメムシ類情報第1号（イネカメムシ対策）

令和8年6月2日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

**7月までに収穫する早い作型では注意  
昨年度イネカメムシの発生を確認している地域では、  
ほ場での発生に注意し、収穫期の防除を実施しましょう**

## 1 近年の発生状況

近年、イネカメムシは県内山間部の一部地域を除き、ほぼ全域で発生が確認されています。

昨年度（令和7年度）県内94ほ場で行った水田における20回すくい取り調査において、調査ほ場あたりのイネカメムシの平均年間捕獲頭数（7月～9月の5回調査の合計）は、令和7年度は2.12頭（平年3.48頭、前年4.48頭）であり、過去10年間と比較して、平年並の状況でした（図1）。しかしながら、調査ほ場あたりのイネカメムシの平均捕獲頭数について、調査時期別に比較すると、**昨年度は7月下旬の発生が多く、7月までに収穫する早い作型では今年も注意が必要です**（図2）。

昨年度の予察灯におけるイネカメムシの誘殺数（5月～10月の合計）は、県内4地点（長久手市、弥富市、西尾市、豊川市）では、平年並～少ない状況でしたが、大口町ではやや多い状況でした（図3）。**発生は地域差があり、越冬前のイネカメムシの個体数が多かった地域では、近年同様に今年もイネカメムシの発生が多くなる可能性があります**。

昨年度イネカメムシの発生を確認している地域では、ほ場での発生に注意し、適期防除を実施しましょう。

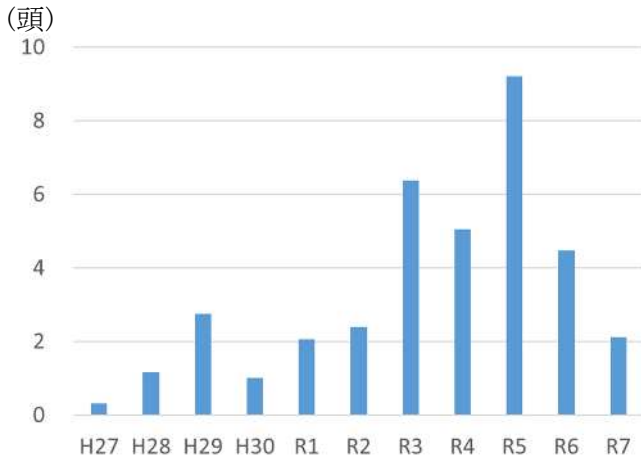


図1（左上）  
調査ほ場あたりの平均年間捕獲頭数  
（平成27年～令和7年）

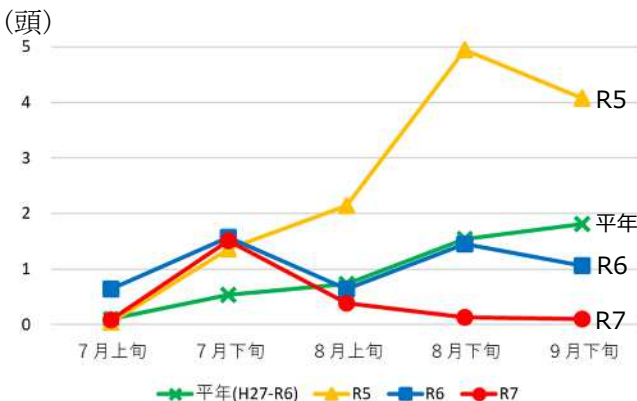
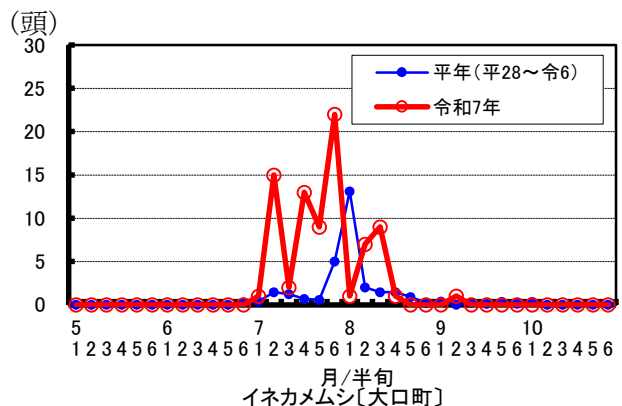


図2（左下）  
調査時期別の平均捕獲頭数  
（調査ほ場あたり、令和5年～7年）

図3（右下）  
予察灯におけるイネカメムシの誘殺状況  
（令和7年、大口町）



## 2 防除対策

イネカメムシは、出穂直後から籾を吸汁し不稔籾を生じさせることから、発生すると減収につながります。このため、早い作型では出穂期に薬剤防除を実施しましょう。薬剤はフロアブル剤や液剤、水溶剤等の散布剤が効果的です。さらに、他の斑点米カメムシ類の防除も兼ねて、出穂期防除の7日から14日後頃（イネカメムシの発生が多い場合は7日から10日後）に追加防除しましょう（表）。

なお、一部の地域ではエチプロール水和剤（商品名：キラップフロアブル）でイネカメムシに対する感受性が低下している事例が生じていることから、防除薬剤の選定については地域の指導機関等に相談しましょう。同一成分を含む薬剤（商品名：キラップ粒剤など）も注意しましょう。

また、遅い作型については、早い作型での発生状況や8月上旬頃発表予定の病害虫発生予察情報を参考にすることで、防除を検討しましょう。

## 3 防除における注意点

特定の農薬の連用を続けると、イネカメムシに対する農薬の感受性が低下する恐れがあります。1回目防除（出穂期）と2回目防除（追加防除）の薬剤のIRACコードが異なるように薬剤を選定しましょう。

表 稲の斑点米カメムシ類（イネカメムシ）に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード
スタークル／アルバリン顆粒水溶剤	収穫7日前まで	3回以内	4 A
スタークル液剤10			
エクシードフロアブル	収穫7日前まで	3回以内	4 C
キラップフロアブル（注）	収穫14日前まで	2回以内	2 B

（注）キラップフロアブルは本県一部地域でイネカメムシに対する感受性低下を確認しているため、感受性低下を確認している地域では使用を控える。（2参照）

成分ごとの総使用回数に注意する。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細は、[https://www.croplifejapan.org/assets/file/labo/mechanism/2025/mechanism\\_irac03.pdf](https://www.croplifejapan.org/assets/file/labo/mechanism/2025/mechanism_irac03.pdf)を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。